
黒き龍の舞

かなめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き龍の舞

【Nコード】

N1069BA

【作者名】

かなめ

【あらすじ】

ある夜、出会った踊り子と皇子。二人が出会ったときから全てが動き出す。

龍とか魔女とか舞だとか。まあファンタジー。

別サイトで連載中。

この国で否、この世界で一番の古株、そして史上最強の魔女と呼ばれた女が忽然と姿を消した。世界中で彼女を探し回ったが誰一人見つけられなかった。

彼女は別の人物に転生していた。前の彼女の身体は年を取りすぎて弱っていた。それに加え、不治の病におかされ、身体が石化していった。転生したことで、新しい身体を手に入れた。力を抑え、認識できないようにもした。そして、大陸からだいぶ離れた孤島に移り住み、自然の中で一人暮らしていた。

そんな生活も突然終わりを告げた。彼女しかいないはずの誰も近寄らない孤島に、突如強い 気 が現れた。彼女は力がより強く感じる方へ向かった。

森の奥の泉のそばに、胸に抱えられるほど小さな黒龍が青い光に囲まれながら存在していた。魔女は抱き寄せてみた。すると、まとっていた光は薄くなり、一層 気 が増した。あの光が黒龍を護っていたようだ。魔女は黒龍の力を封印した。きつとこの黒龍の存在は全世界の 気 を操れる者たちに知れ渡ったに違いない。放っておけばいいものの、魔女の気まぐれだった。

もう二度と帰ってこないだろう我が家へ連れ帰り、必要最低限のものを鞆に詰めて、孤島を出た。もうしばらくしたら、捕獲してしまおうと各国から多くの人間が来るだろう。彼女らは東洋唯一の大帝国へ渡ることにした。

黒龍は小さな女の子の姿をとった。たいていの龍は人型をとり、人間たちと変わらぬ生活を普段送る。泊まった宿で黒龍を寝かせ、魔女はその隣に横たわった。そのうち瞼が重くなってきて深い眠りについた。

魔女は夢を見た。

黒く美しいつがいの龍の夢だ。

「もし、我らの声が聞こえているだろうか」

片方の龍が魔女に話しかけた。

「ああ、よく聞こえるよ。あんたたち、あの子の親かい」

いかにも、と龍はうなづいた。

「なぜ、あの子をあんなどころに置いてったんだね」

しばらく沈黙が続いた。魔女も気が短い方ではないので、相手話がすのを待つ。

「……我らはもうこの世には存在しない。いつだったか、世界が大混乱に陥った折、気が狂った仲間に殺されたのだ」

一〇〇〇年以上前、謎の病が流行った。当時は治療法もなく、多くの命が失われた。その原因として黒龍の一族が殺された。黒歴史に記される史上最悪の“大虐殺”だった。

「我らはその子だけは守らねばと封印したのだ。引き取り手に相応しい者が訪れるまで。そなたを見込んで頼む。娘の面倒を見てほしい。見返りは何もできない。理不尽だとは思っている。だが、引き受けてはくれないだろうか」

魔女は小さくため息をついた。

「心配しなさんな。アタシははなっからその気だよ。じゃなきゃ、拾わないさ。自分でも驚いたよ」

彼女は顔を引き締めた。

「任せな。何があっても守るよ」

そこで夢から覚めた。朝日が昇り始めたまだ薄暗い時間だった。傍らで規則正しい寝息をたてている赤子を魔女は眺めていた。

一〇〇〇年以上前に両親は死んだと言っていた。ならば、この子は一〇〇〇年は封印されていたことになる。長い間、一人でずっと眠っていたのだ。

寂しかったろうに。

魔女は素直にそう思った。彼女が頭を撫でてやると赤子が目を覚ました。

「おや、目、覚めたかい」

まだ話すこともできない赤子は魔女の顔を見るなり、にこっと笑った。魔女もつられて笑顔になった。

「アタシはね、美咲っていうんだよ。そういや、あんたの名前、決めなきゃね……」

何か参考になるものをと部屋を見渡す。部屋の花瓶に花が活けてあった。月詠草だった。月詠草は白く小さな花を咲かせ、満月の夜は青く輝くこの国の特産品だ。朝日が昇り始めたために、光が射し込んで夜光るよりもまた別の美しさを放っている。

「そうさね、つきはな月花でどうだい？」

赤子は再び笑った。それを肯定の意ととらえた魔女は赤子　月花を抱き寄せた。

「あんたはアタシがきっちり面倒見るからね」

今日の花曇は大忙しだった。というのも、今日は貴族のお偉いさんが来ると言う話だったからだ。花曇は踊り子では国一番の「かぐや」とその他優秀な娘が揃っており、踊りの技術だけでなく、話術も気品も人柄のよさも備えていたため、庶民向けの店ではあったが、貴族などのお屋敷に呼ばれること、今日のように訪れることもしばしばだった。

「さあ、急いで支度しな。もうじき、いらつしやるよ」

手を叩きながら皆を仕切るのはこの店の女将、美咲だ。年齢不詳の妖艶な美人で、サバサバした性格により皆に慕われている。

準備も落ち着いたところで、お客がやってきた。

「ようこそ、いらつしやいました。準備は整っておりますのでどうぞお上がりください」

女将が出迎え、案内した。普段ならば滅多にそういうことはないが、今日は特別だった。

今回は常連のお客が親戚の息子にぜひとも国一番の踊り子の舞を見せたいという話だった。だが、美咲は単にそういうわけではないとふんでいた。

この国は龍と人間が住まい、その頂点は龍であり、貴族も龍の血を引き、庶民も龍の血を引く者が多い。だが、龍は属性を表す”色”を持つ。普段見えるところで言えば、髪の毛、瞳に特徴が現れる。それと、あまり知られていないが、肌の質感もそれぞれの性質を表す。

今日の客は、髪も瞳も特に珍しいものではなかったが、肌の質が格段に違った。美咲はそれを見逃さなかった。

「今日のお客様は、ハマしないように。かぐや、特にお前は問題が多いんだから大人しくしときな」

問題児には釘を刺し、いよいよ舞の時間になった。かぐやも国一

の踊り子ではあるが、問題が多いため、出番はいつも決まって、一番最後の舞だけだった。

宴も中盤辺りで、貴族の親戚の息子が気分転換だと店の中庭に出た。

すると、ふと向かいの部屋の様子が目に入った。踊り子たちの稽古場のようだった。黒髪の美しい踊り子が、まだ幼い子たちに舞を教えている。

「あ、また、同じところ、間違えたよ」

優しく教えている踊り子は、励ましながら上手くやる気を出さしている。たまに、実際にやって見せる姿は見る者を惹き付ける見事なものだった。思わず、近寄ってみたくなって中庭をまっすぐ渡る。だいぶ近づいたところで、踊り子たちはこちらに気づいた。

「あら、お客さん。お見苦しいところをお見せして申し訳ありません。この通り、私どもは化粧もしておりませんし、衣装も纏っておりません。お見せできる様でもありませんので、どうかお戻りくださいまし」

「いや、こちらこそ失礼した。そなたの舞が美しく、すっかり魅せられてしまったようだ。良ければ、座敷に上がってくれまいか」

踊り子は苦笑して、返事をしなかった。

「名前だけでも教えてほしい。私は<ruby><rb>陽(ハル)</rb></ruby></p>

「一花</rb>><rp></rp>><rt>ハナ</rt><rp></rp>></ruby>>」

踊り子は小さく答えてその場を去った。そして、長く席を外しているのを見かねたのか従者が呼びに来た。

「いよいよ、最後の舞となり、宴も最高潮となった。」

「最後はうちの自慢の踊り子がおもてなしいたします」

女将がそう言っ、お待ちかねの”かぐや”の登場となった。

入ってきた瞬間、陽は目を見張った。彼女は先ほど出会った”花”と名乗った踊り子だった。基本、踊り子たちは女将に店での名前をもらう。かぐやもそれと同じだろうと思われた。

先ほどとは違ってかわり、凜とした何者も近寄らせず、しかし、惹き付けられずにはいられないそんな雰囲気を感じていた。

かぐやが構えると、その場の空気が一瞬にして変わった。優美な曲に合わせ、体の曲線を強調しつつ、両手に持った扇子を器用にこならせて美しい曲線を描く。決まった型には違いないが、他の踊り子が舞うのとはまるで異なっていた。動きの一つ一つが洗練されていて、隅々までキレがある。舞の中でどこを魅せるべきかを知り尽くされていた。

「すばらしい。さすがだ」

貴族は手を叩き、かぐやの舞を高く評価した。

かぐやの去り際にちらつと陽の方に目を向けたのを美咲は見取っていた。帰るの時、陽はそつとかぐやのことを探したが、見当たらなかった。

かぐやは女将に呼び出され、女将の私室にいた。

「まず、今日来ていた貴族の親戚の息子ってのは、おそらく、皇族あたりだろうね」

「そうでしたか」

「なんだい？ その反応は。まるでわかってたみたいに」

美咲はかぐやをじっと見据えた。

「少しだけ、何か感じるものがある。何とも言えないけれど、嬉しいのか、苦しいのか、はっきりとはわからない、複雑な感情が胸一杯にあってもならないんです」

同等の力を持つ者に出会った嬉しさか、はたまた、一族を殺された憎しみか。美咲には彼女が抱える感情を推し量ることはできなかつた。

花曇は相変わらず大にぎわいではあったが、かぐやの登場が激減した。女将はその理由を語らないが、例の貴族が訪れた時からだったので、身請けの話も出ているのでは、という噂さえ飛び交った。

かぐやは美咲の愛娘で、実の子ではなく、孤児だったのを引き取ったという話は花街では有名な話であったが、本当の名を知っているのは彼女の側近の色葉、養母の美咲、美咲の右腕の甚太だけだった。

それだけかぐやの正体は隠し通されていたため、私生活すら謎だった。

「つたく、美咲さんも何考えてんだかね。一番の稼ぎ頭を引っ込みちまって」

かぐやに魅せられた者たちはそう言って嘆いた。

かくや　　月花は皇室からの呼び出しを受けようか受けまいか悩んでいた。できれば断ってしまいたかった。皇室と関わりが出来てしまうと、身元を隠している養母　　美咲や月花自身にとって都合が悪い。しかし、受ければ店として箔が付くし、客足も伸びる。そして、この間の皇族と思われる青年と会えるかもしれない。お母さん

「お母さん」
月花は美咲を呼んだ。それと同時に美咲がいつも持っている扇子が飛んでくる。避けきれず、額を押さえていると、本人が現れた。「アンタね、」美咲さん”って呼べって言うてるだろ。次そう呼んだら、今回よりひどいからね」

すっかり忘れていたが、そう呼べと言われていたことを思い出す。確かに母であることは間違いないが、美咲は気にくわいならしい。

「で、用件は」

「あの、皇室からの」

「ああ、それかい。受けな」

美咲の予想外の反応に月花が驚いてしまう。

「でも、”丸”とか”風”が出てきちゃうかもしれないし」

丸と風は月花の中の自分ではない自分だ。丸は自分の身を守れるようにと美咲の訓練の最中生まれた。頼りがいはあるが、短気で気が荒いため、騒動の発端は必ずと言っていいほど、丸だった。風はこの店を始めた頃、対人関係が苦手な月花の代わりに生まれた。かくやとして店に出ている大半は風が表に出ている。ただ、面倒くさがりで事なかれ主義な彼女は全てを月花に丸投げすることも多々ある。月花はそれも不安だった。

「そこはアンタが自分でどうにかしな。あたしもついていくけど、バレたらそのときに考えればいい。心配しなさんな。あたしはアンタを見捨てやしない。会いたいんだろ？　この前の坊やに」

美咲は優しい笑みを浮かべて、月花を抱きしめた。月花はそれだけで安心した。

「さあ。そうと決まれば、甚太に返事を頼んで、新しい着物の用意と舞の練習だね」

城の謁見の間にて、月花は皇帝を始めとする皇族、大臣諸々の前に跪いていた。そのすぐ後ろには美咲、甚太が同様に跪いている。

「そなたがあの花曇の”かぐや”か？」

「はい、左様にございます」

内心、緊張して膝が笑う状態ではあったが、そこは堪え、声が震えそうになるのも何とか隠す。ここで”月花”が気を失って、”丸”や”風”が出てくるのだけは避けなければならない。かぐやは決して感情を表に出してはいけない。

「面を上げなさい」

顔を上げた拍子に”陽”の姿が見えた。陽は帝国の第一皇子、陽はる親ちかだった。東宮になること間違いなしとされる極めて優秀な方だ。

陽の方もわずかに反応したように見えたが、まるで気のせいだったかのように、ほんの一瞬だった。

「さすが国一番の踊り子。器量もいい。だが、肝心なのは舞だ。今晚の宴の際、じっくり見せてもらおう」

「はい、かしこまりました」

皇族が立ち去ったあと、案内役の侍従が三人を用意していた部屋に案内する。

用意された部屋は広がった。三人とも同じ部屋で、共有スペースと各自の部屋がついている。

「こりゃあ、すごい部屋だね。まるでこのときのために用意されたみたいじゃないか」

美咲は感心しながら、調度品を見渡す。自分の店に置いてある物と比べたり、配置などを見ているあたりはいかにも店主らしい。

「さあて、宴までまだ時間がある。ちよいと舞を確認して、あとは準備。甚太はかぐやの衣装と装飾を。花はついてきな」

十分満足したのか、指示を出す。持ってきた荷物をほどこき、言われたものを出す。今回の演目は”剣舞”にした。剣舞は踊ることができる人数が少ない。まず、肉体を鍛えなければ重い剣を持ちながら軽やかに動き回るなどできない。そして、重い剣を持つわりに複雑な細かい動きが多い。しなやかな肢体の動きも重要になる。普通の人間ではまず無理だ。

帝国にはほとんど”龍人”しかない。龍人は人間よりはるかに肉体面において優る。だからこそ、踊ることも可能だといえる。今日のために月花は練習を重ねてきた。失敗は許されない。月花は煌びやかな衣装に身を包み、今夜の舞台へと向かった。

会場には皇族と一部の貴族しかいなかった。その貴族の中にはあの夜、陽親を連れてきた男性もいた。彼は皇帝の兄だった。

「いやはや、相変わらずの美しさですな」

月花は一礼し、位置についた。音楽が流れ始めるのと同時に、動き始め、音楽にあわせて、時に激しく、時に優雅に。見る者を飽きさせない。そして彼女が踊るたびに香る花の香りがこの場にいた人々の心を癒した。

「すばらしい舞であった。それに花の香り。そなたは”花龍”か？」

「お褒め頂きありがとうございます。おっしゃるとおり、私は花龍でございます」

龍人には属性がある。大抵の龍人は一属性しかないが稀に複数持つものもいる。月花はその中の一人だった。

花龍の特徴として、身体から花の香りを放つ。月花の香りは月詠草のものだった。月詠草の香りを持つ者はほかにいない。それだけで希少価値が高かった。

「どうだ？ 褒美として城で働かないか？」

「申し訳ありませんが、それは決めかねます」

「余の言うことが聞けないと？」

「いえ、左様なことはございません。ただ、私はただの踊り子でこ

ざいます。女将にご相談を」

城で働くなどできるわけがなかった。まだ未熟なまま美咲の元から離れてしまえばどうなることか、月花には恐ろしくて出来ない。

「まあよい。下がれ」

一礼して会場を後にした。

「よくやった」

美咲は手放しで喜び、褒めた。

「ありがとうございます」

「最後、面倒事、こつちに回したのは頂けないけどね
少し惜しいと親指と人差し指で隙間を作る。

「にしてもよくやった。湯に浸かってきな」

月花が風呂に向かったとき、誰かが戸を叩いた。

甚太が扉を開けると、そこには陽親がいた。

「かぐやはいるか？」

代わりに美咲が出る。

「今は風呂に入っておりますが、ご用件ならお伺いしますが」

「いや、直接話がしたい。少し待たせてもらう」

陽親は少々強引に部屋に入ってきた。美咲は何となく何をしに来たのかわかっていたが、あえて何もしなかった。

月花が風呂から上がってきて、まず、陽親がいることに驚いた。

「なぜ殿下がこちらに？」

「詳しくは後だ。申し訳ないが、席を外してくれないか」

美咲は甚太を引つ張って奥の部屋へ向かう。ただ、話の内容を知るための仕掛けは施しておいた。

部屋には月花と陽親だけになった。

「花、君がかぐやだと言うのは、あの晩、すぐにわかった。だけど、まるで別人だった。幼い見習いに教えている君は花の香りなどしなかった。それがどうだ？ かぐやとして出てきたら、月詠草の花の香りを纏ってた。香かと思えば、花龍だという。君は複数属性を持つているのか？」

「話せない」

話せるはずがない。美咲が許すはずがないし、たとえそうでなくとも、言いはしない。複数属性を持つ者がどうなるか。皇族やその親族に引き取られたり、めとられたりと、結局は皇族に力を持たせるために”使われる”。まず始めに、美咲に言われたことだ。当然、属性は一つだけより、複数持っている方がそれだけ強い。皇族には周囲の反乱分子を抑えるほどの力が必要だ。身内に率いれることで、反乱分子を芽から摘むのと一石二鳥という訳だ。

にも関わらず、皇族に話すはずがない。まして、白龍になど。黒龍の存在がバレてしまえばどんな目に遭うか。

「話せない」？ それは「

「はい、そこまで」

中断したのは美咲だった。

「皇子、私は娘を危険にさらす訳にはいかない。これ以上聞くなら、私は躊躇わない」

魔女が身を挺して月花をかばう。もう何十、いや何百年と姿を隠していたはずの魔女がこんな近くにいたなど、誰が思いついただろう。月花は自分のために正体をさらさねばならなくなった美咲を不安げに見た。

「まさか、魔女がいたとは。ますます花には驚かされる。今日ここであつたことは誰にも口外すまい」

この部屋は一切の情報も漏らさぬよう遮断されていた。怪しまれぬよう、小細工までしてあつた。美咲は、場合によっては陽親の記憶も消すつもりだった。

「念のため、今日のことかばれそうになったときのために、皇子には記憶系の呪いをかける。ばれる前に記憶から抹消される」

陽親も同意した。彼が月花を害すようなことはしないとわかっていても、白龍であると言う事実から不安を拭い去ることができないでいた。

美咲がいくつか呪文を唱え、陽親の額に指を当てる。指先が淡く光り、すぐに消えた。

「この場にいる人間以外に話せば、こちらの情報の一切は消えるからそのつもりで」

陽親が頷いたのを確認して、美咲は結界を解除した。

外から彼を呼ぶ声がする。表情からして、従者を撒いてきたのだらう。

「邪魔をした。また会おう」

扉を叩く音がする。それに答えて陽親は出ていった。

部外者が全くないなくなつたところで、再び結界を張る。

「ごめんなさい」

上手く答えられなかったことを悔やんで、月花は謝る。美咲はそつと抱き寄せて頭を撫でた。

「今日のことかどう転ぶかはわからないけどね、しばらく距離をとろうと思うよ。実はもう店を畳むつもりだったんだ」

事前に店の踊り子たちの引き受け先は厳選し、すでに移動が始まつている。今頃店も粗方整理されているだろう。

「目的も果たせたんだ。早々にお暇するとしようかねえ」

結界を解除し、月花には寝るよう指示し、甚太には護衛を頼んだ。じきに皇帝から呼び出しがあるはずだ。上手い文句でこの国から立ち去らなくてはならない。美咲は冷静にと自らに言い聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069ba/>

黒き龍の舞

2012年1月6日17時52分発行